

# 高橋たか子の『亡命者』を読む

## 目次

- 一 はじめに
- 二 八私Vの物語
- 三 ダニエルとアニーの物語
- 四 神のほうへ
  - (1) 亡命者の意識
  - (2) プスチニアでの生活
  - (3) 男性への拒絶意識
  - (4) ダニエルとアニーにおける信仰と愛
- 五 おわりに

## 一 はじめに

井上三朗

高橋たか子の『亡命者』は、『群像』一九九五年八月号に掲載され、同年十二月に講談社から刊行された長篇小説である。『君の中の見知らぬ女』(二〇〇一)、『きれいな人』(二〇〇三)とともに三部作をなす。というのも、これらの作品は、高橋たか子の言うように、「三つともフランスを舞台にして日本人の「私」という話者以外はすべてフランス人の作中人物たちが作りなすドラマ」<sup>1)</sup>であり、「そのドラマの部分が劇中劇となる、といった共通の構造」<sup>2)</sup>をもつからである。

『亡命者』は、一九八〇年代に作者高橋たか子がフランスで体験した観想修道生活から題材を得ている。自伝『私の通った路』(一九九九)によれば、高橋は一九八〇年十一月にパリでペール・ベルナールにめぐりあっている。ペール・ベルナルとは、本名がペール・ピエール・マリ・デルフィユで、パリにできたばかりのエルサレム会の創立者である。高橋はこの神父から修道生活への誘いを受

け、一九八一年五月頃、貧しいアパートを見つけ、エルサレム会の隠修者となる。エルサレム会には修道院施設がなく、隠修者はパリの下町の、ラウラと呼ばれる独居部屋に居を定め、観想修道生活を送った。高橋は一九八五年十月、エルサレム会に正式の志願者として入会する。この過程で、彼女の住まいは貧しいものとなる。最初の部屋は家賃が一六〇〇フランで、トイレとシャワーが付いていたのに、八五年の時点では、家賃が四〇〇フランの、トイレもシャワーもない、五階の屋根裏部屋になる。このようなラウラでの生活体験は、『亡命者』において、パリのプスチニアの記述に生かされる。また高橋はこの時期、フランス各地の修道院に滞在している。八八年にはエルサレムを訪れている。これらの体験も、『亡命者』執筆の際に活用される。なお、高橋たか子はエッセー集『この晩年という時』のなかで、『亡命者』で、南仏の地にプスチニアと名づけられる小屋から成る共同体を描いた<sup>3</sup>ことを振り返り、「フランスでそんなものを見たのでは決していないが、人々が成熟しているフランスでなら、あんな形態が実在してもおかしくはない、と認めてのこと<sup>4</sup>」だと述懐している。このように『亡命者』に出てくるプスチニアは実在しない。八〇年代における観想修道生活の体験が、高橋にプスチニアの着想と夢想をもたらしたことは疑いを容れない。

この小論において、『亡命者』の読解をこころみたい。作品は二部に分かれ、第二部のはじめまでは、△私▽のフランスでの生活が語られる。第二部は「小説『亡命者』」という、△私▽の作成した

物語を含み、さらに「小説『亡命者』」は、主人公ダニエルが書いたノートである「手記『亡命者』」を付随させている。したがって、この作品は三重の構造になっている。そこでまず、第二部のはじめまでに繰り返し行われる△私▽の物語を概観することにしよう。次に、「小説『亡命者』」「手記『亡命者』」を一瞥し、そこで叙述されているダニエルとアニーの物語を分析する。それから△私▽の亡命者の意識、プスチニアでの生活、男性への拒絶意識をしらべ、そしてダニエルとアニーの内心での、信仰と愛との関係を明らかにする。さいごに、高橋たか子における他者の不在の問題との関連で、『亡命者』をとらえる。すなわち、高橋のこれまでの小説のなかで、人物たちは他者の内面を顧慮する姿勢をもたなかった。自己と同じように他者が存在するのだということを認めなかった。人物たちの意識を特徴づけるのは、他者の不在であった。『亡命者』では、どのようにになっているのか。このことを考察したい。

## 二 △私▽の物語

『亡命者』は二つのパートから成り立つ。作品は「1」「2」という数字によって分割されている。これを第一部、第二部と呼ぶことにする。第一部は、主人公兼語り手の△私▽が、一九八六年十月末のパリで、六カ月の滞在許可証の更新のため、警視庁に出向くところから始まる。長い行列に並んで、ようやく許可証を手に入れた

△私▽は、帰路につく。△私▽の部屋は五階建ての建物の最上階にあり、プスチニアと呼ばれる。第一部では、△私▽がこのプスチニアに身を落ち着けるまでの経緯がつまびらかにされる。

△私▽は三年前の一九八三年の秋、「日本人としての私を国境の向うに捨て」（二二二頁）、フランスにやってきた。△私▽は中年の作家で、何年か結婚生活を経験した。だがフランスにいる時点で離婚している。△私▽はどうして日本を捨てたのか。「ここではな」という異和感」（八三頁）にさいなまれたからである。けれども、「子供の頃の孤独において、別な環境へ行けば何かがあると希求し、そこへ行ける年になって、やはり直面する違った孤独において、もっと別な環境ならと希求し、次々と別な環境を巡ってきたけれど、そんな希求の延長としてフランスへ行けばそうではないものがあるだろう、と思つたわけではない。なぜって、人と人とは擦れ違うことを、すでもう知りつくしていたから」（二六頁）と内省しているごとく、△私▽は何かへの「希求の延長」としてフランスに渡つたわけではない。『装いせよ、わが魂よ』のヒロイン山川波子のように、△私▽は理想的な男性との出会いを待望しない。何も期待せず、孤独のなかで自らの虚無を生きている。

しかしながら、△私▽の関心をひくことが一つだけある。宗教にかかわることである。△私▽はパリの学院で神秘霊生史を聴講している。これは、「フランスに滞在していくために必要な、学生という身分を維持していくため」（五二頁）であるが、やはり宗教に興

味をもっているからでもある。△私▽は宗教音楽にも心を惹かれる。寒い日、学院での八時半より十時までの授業からの帰途、ウルム街のあたりを歩いていると、ある建物からパイプ・オルガンの音が洩れてくる。その音に誘われて、建物の中に入る。老婦人が一人でパイプ・オルガンを弾いている。△私▽は「魂の歌」と「神の声」（二八頁）とを聴きとり、心を動かされる。こののち、△私▽は同じ曜日と同じ時刻にウルム街におもむき、老婦人がパイプ・オルガンを弾く現場に立ちあう。ある日、ウルム街の建物から、老婦人が男を連れて出てくるのを目撃する。男とは神父である。△私▽は二人のあとをつけ、サン・セヴラン教会に達する。教会では、神父がパイプ・オルガンを演奏する。△私▽は「人の実存と神の実存とが躍動的に交叉するような曲」に感動し、「私がこの世にいることが過不足なく償われている、いや、贖われている、という気分になる」（三二頁）。このように△私▽は宗教音楽に魅惑される。神のほうに向かう心の動きがかいま見える。

△私▽はこの神父をつうじて、マリ・リュスを知る。神父のパイプ・オルガンの演奏を聞いたあと、△私▽はサン・セヴラン教会にかよう。神父の演奏を再び聞くことはない。とはいえ、神父から、待ち合わせをしていた中国人の女性と間違えられて話しかけられる。神父は中国人女性にパイプ・オルガンを見せる約束をしていた。しかしこの女性は現われず、かわりに△私▽が見せてもらう。その際、△私▽は学院で、神秘霊生史の講座に出席していると伝える。

すると神父は、「私の友人で、マリ・リュスという女性も、その講座に出ています、背の高い、赤いフレームの眼鏡をかけた人です」(三九頁)と教える。こうして△私▽は一九八四年二月の末、学院での授業の終了後、中庭でマリ・リュスに接近し、彼女と昵懇の間柄になる。マリ・リュスは高校で哲学の教師をしている。

一九八四年の六月末、一年目の学年が終わったとき、△私▽はマリ・リュスとともに、彼女の運転する車で、ポワチエの南にあるベネディクト会修道院に向かう。五泊六日の旅で、修道院滞在は、今回が初めての体験である。△私▽はこの体験をつうじて、「明るさに出会」う(六二頁)。旅の途中、△私▽はマリ・リュスに、「私は、フランスに着いた時、暗い日本から明るいフランスへ来た、と感じました。この明るさへむけて、国境を越えたのだ、と」(五三頁)と胸襟を開き、「そう、きつと、神があるからだわ」(五四頁)と言いつついた。△私▽が修道院で「出会」う「明るさ」とは、神を感知したことに因るものである。

△私▽は「明るさ」をもとめて、別の修道院を訪問することを切願する。あとの予定があるマリ・リュスは、アドレスと電話番号を書いた紙片を渡し、素っ気なく別れていく。△私▽は列車やバスやタクシーを乗り継ぎ、苦勞して修道院にたどり着く。このベネディクト会修道院では、五、六十人の黒衣の修道士たちが寝起きをしている。「朝の祈り、三時課、ミサ、六時課、九時課、晩の祈り、終課、読書課」(七二頁)という順で時をすぎ△私▽は、「超時間」ある

いは「永遠」へと「呑みこまれ」る気分を味わう(七二頁)。△私▽は七泊、この修道院に逗留する。

パリに帰った△私▽は、マリ・リュスに電話をかけ、彼女から教わって訪れたベネディクト会修道院のことを報告し、謝意を表明する。数日後、二人は会う。マリ・リュスは兄の話をする。兄は、彼女が△私▽に紹介した修道院にいる。「アルジェリア戦争に従軍して、地獄を見きつてしまい、観想修道生活に入りました、もうずいぶん昔のことですけど。いま五十二ですし、二十五の時に兵役で軍隊に入ったのです。でも、兵役の二年だけで出てくればいいのに、五年間も、最後の最後までいてしまった」(七九頁)と言い、「兄はアルジェリア独立までそこにいてしまったのです。そして、戻ってきて、ひょいと、修道院に入ってしまった。それっきり。唯一の肉親である私には、会いにくるな、と言います」(八〇頁)と打ち明ける。△私▽はマリ・リュスの兄のいる修道院に親近感を覚え、その修道院を再訪しようと心に決める。

かくして一九八四年八月、△私▽は修道院に再度おもむく。そしてマリ・エステルを知る。△私▽は朝の祈りの前におこなわれる読誦ミサに列席したとき、この女性の存在に気づいていた。三日後、農場の店に牛乳を買いに行つて、牛乳がなくて、「牛乳、もうないんですか」(八八頁)と落胆したとき、「うちまでいらつしやれば、私の牛乳さしあげますよ」(八八頁)と彼女から声をかけられる。これがきっかけとなって、彼女と親しくなる。マリ・エステル

はプスチニアと呼ばれる小さな部屋に住んでいる。部屋の片隅には、「イエズスの顔を描いたアイコンとその前に灯るローソクの火」(九五頁)がある。一つの壁には、「人の体ぎりぎりの寸法の、低いベッド」(九五頁)がくつつけられていて、入口近くには、「まるで廃物のような机と椅子」(九五頁)が置かれている。「貧しさ」(九五頁)がただよう部屋である。マリ・エステルは、「わたしは、観想修道会をやめてから、こんなふうな部屋を漠然と思っていたのです。すると、一九七五年に『プスチニア』という英語の本がアメリカで出て、それを読んだ女友達がすぐにそういう生き方を始めました。南フランスで、ですが。私も、彼女の生き方を見、これだと響き合うものがあり、幸い、この小屋が与えられて、始めたのでした」(九五頁)と△私▽に語る。プスチニアとはロシア語で△砂漠▽を意味する。「誰かがふいにプスチニアに入るべき呼びかけを聞く。すると、その人は、すべてを捨てて、人里離れたところに小屋を作って、そこに入る。小屋がプスチニアなんです。つまりは、その人は砂漠に入る。そこにおいて、神の沈黙と自身の沈黙とを合一させ、一対一でいる。砂漠とは、そういうところですよ」(九五頁)と、マリ・エステルは説明する。「あなたも、こんな部屋を見つけて、こんな生活ができます」(二〇二頁)と△私▽に知らせ、「人里離れた土地でなくてもいいのです。あなたはパリでも出来ます。あなた自身の中が人里離れてさえいればいい」(二〇二頁)と教示する。彼女はマルセルという女性の住所を書いた紙切れを渡す。

パリに帰還した△私▽は、マルセル宛ての手紙をしたためる。マルセルが来訪する。△私▽は学生用のステュディオで生活している。△私▽はマルセルに、マリ・エステルとの出会いの一部始終を話し、プスチニアに住む希望を述べる。九月になって、マルセルは部屋を探し出す。△私▽は、ノートル・ダム寺院の近くに位置するその部屋を見に行く。部屋は八階の建物の最上階にある。トイレは共同で、「バスどころか、シャワーさえない」(二二一頁)。マルセルは、「あなたがよければ」(二二〇頁)と態度を保留する。△私▽は「自分の意志」からではなく、マリ・エステルとの出会いをおして、プスチニアのほうに「招かれて」いるのを感じ、「ええ、決めます」と返答する(二二〇頁)。

翌日、マルセルは車を借りて△私▽の引越しを手伝う。三回の往復で引越しは完了する。マルセルは、「読んで、本質を汲みとって、具体的なことは自分で発見していただく」(二二二頁)と指示して、『プスチニア』のフランス語訳の本を置いていく。こうして新しい生活が開始される。△私▽はノートル・ダムの早朝ミサにかよい、学院での新たな講座、「西洋における修道者の起源」の授業に出る。しかしながら、△私▽の部屋は、周囲の騒音がひどく、霊的生活には適していない。「前の住居がこの世であったとするなら、ここは中間地帯の煉獄であるらしい」(二二四頁)と△私▽は推しはかる。二ヵ月後、部屋の居心地の悪さをマルセルにうったえる。

十一月のある週末、△私▽はマリ・リュスの兄が居住するベネディクト会修道院に三度目の訪問をする。ところが修道院の宿泊所は満員なので、△私▽はマリ・エステルのプスチニアの中二階の客間に泊めてもらう。その客間は「白い天井と白い壁」から成る清楚な部屋で、△私▽は「喜びに包まれ」る（一一七頁）。△私▽はマリ・エステルに、「ここにいと天国のようです。でも、パリの部屋は、まるで煉獄です」（一二三頁）と嗟歎する。するとマリ・エステルは、「ここだって、煉獄です」と応じ、「生きているかぎり煉獄なのです。この世を捨てた人たちは、煉獄をずうっと通つていくのです」と断言する（一二三頁）。

ところで、今回、修道院で△私▽は、はじめてここに来た際、女性用宿泊施設に案内してくれた三十過ぎの女を見かける。最初に出会った折、女は「奇妙に苦しい熱情の目とも言える目」（七一頁）をしていた。女は同年輩の男と一緒にいる。聖堂で土曜日、晩の祈りが、そして翌日曜日、朝の祈りが終わつたとき、男は女に「視線を投げ」る（一一八頁）。男は「苦悩する熱情の目」（一一八頁）をしている。△私▽は女と立ち話をする機会をもつ。「あ、いつか、ここで、ごいっしょでしたね」（一一九頁）と△私▽はたしかめ、一人で来ているのかと訊く。女は「いいえ」と返事し、「たびたび、ここへ来ています」と知らせる（一二〇頁）。△私▽は女の目のなかに、「奇妙に苦しい燃えるような何か」（一一九頁）を読みとる。男と女の視線に「同質のもの」（一二二―一二三頁）を

認めた△私▽は、二人が「愛し合っている」（一二三頁）のを確信する。このち、△私▽はこの男女と再び出会うことになる。

帰宅すると、郵便受けにマルセルの書き置きが入っている。△私▽はマルセルを訪ねる。彼女もまた、△私▽の使っている部屋がふさわしくないと結論する。そこで自分の部屋を△私▽にゆずり、自分はほかのところへ移ろうと申し出る。かくして一九八四年の暮れ、引越しがおこなわれる。今回は、二人が各々ひとりで行動する。車はない。△私▽は八回の往復で荷物を運ぶ。マルセルの勧めに従つて、△私▽は荷物をほどこ前にペンキを購入し、天井と壁とを真っ白に塗る。もちろん、今度の部屋にも、バス・シャワー、トイレはない。家賃が月、たつた四五〇フランの貧しい部屋である。

△私▽は新しい部屋での生活に慣れる。学院での、「西洋における修道者の起源」の授業は、佳境に入る。パリでプスチニアに住んでいるワーニヤという女性がマルセルとともに冷蔵庫を△私▽の部屋に運びこむ。一九八五年の七月、△私▽はパリを発ち、フランス中部の男子修道院を訪れる。このあと、南フランスの女子修道院におもむく。その修道院で△私▽は、前の年の十一月、例のベネディクト会修道院で一緒だった三十過ぎの男女を見かける。今回、二人は、「あの時のようにこつそり目を交わすというふうではない」（一四四頁）。二人の目には、「苦悩する熱情といったものは認められない」（一四五頁）。男が女の名を呼んだことから、女がアニーという名であることがわかる。△私▽は、一人で落日を眺めているアニー

と話をする。アニーが夫ダニエルに同伴していること、二人が四年前に結婚したことを聞き知る。

一九八六年の、復活祭後の休みに、△私▽は五泊の予定で南フランスの女子修道院にまた出かける。アニーがその頃、そこにいると言っていたからだ。△私▽はアニーとダニエルに再会する。アニーは、△私▽と出会うのは、「たぶん、これが最後です」(一五七頁)と伝え、「わたしたち、今、出発するのです」「わたしたち、夫婦ですが、修道者になるのです。別れずに、二人で、共に修道者に」(一五八頁)と告げる。△私▽は二人に、「何処に行かれるのですか」(一五九頁)と質問する。すると、「イスラエルです。砂漠です」(一五九頁)という、ダニエルの答えが返ってくる。作品第一部は、ここで終わっている。

『亡命者』第二部は、一九八六年の十月末、△私▽が滞在許可証を得て、警視庁から戻るところから始まる。つまり作品冒頭の時点に回帰する。このあと、事件らしい事件は生起しない。同じ建物の四階に住む老婦人から声をかけられ、オルセー美術館の切符を買ったこと、十二月に、ストライキによる停電のさなか、オルセー美術館を見学したことが、△私▽に起こる主な出来事である。結局のところ、△私▽にとって、フランスでの生活とは何なのか。△私▽は学院で神秘霊生史、それから「西洋における修道者の起源」の授業に出る。ステュディオを引き払い、プスチニアで暮らす。修道院での滞在を繰り返す。渡仏してからの△私▽の内面を特徴づけるのは、

神への希求である。

### 三 ダニエルとアニーの物語

作品第二部では、△私▽の生活の簡略な記述のあと、「小説『亡命者』という物語が置かれている。これは、オルセー美術館から帰った△私▽が、修道院で一緒だった男女、ダニエルとアニーに思いをはせながら、この二人をモデルにして書きはじめた小説である。この小説を検討することにした。

物語は、ダニエルがアニーに、「修道者になろうと思うんだ、二人で」(一七八頁)と提案するところを発端とする。ダニエルは十年前、ロンドンからパリに夏のヴァカンスで帰省しているときに、アニーと邂逅し、愛し合う仲となった。その頃は、キングズ・カレッジのフランス科に籍を置き、フランス語とフランス文化を講じていた。ダニエルはキリスト教からすっかり離れていて、「アニーの中に別な「人」への愛があるのが気に入らぬ」(一七八頁)と咎め、夏が終わると勤め先のロンドンに戻り、「女から女へと自堕落な生」(二七八頁)をつづけていた。ところが三年前、彼はキングズ・カレッジでの職を辞し、フランスの地方都市でジャーナリストの仕事を見つけ、アニーと結婚する<sup>8</sup>。そして修道者になりたいと思うようになる。ダニエルはアニーに、「君と愛し合っていると、そんな希望がでてきたのだ」(一七九頁)と告白する。「いつから？」とのアニーの

問いに、「最初から、あつたんだ。(…) あつたものが、すこしずつすこしずつ浮かび上ってきた、この三年のうちに」と答える(一七九頁)。ダニエルはアニーと結婚することによって、徐々に神に向かつて歩み出す。「アニー、君と愛し合つてると、こんなにも愛し合つてるのに何が足りない、決定的に足りない、それは何だろうと思ふようになったのだ」(一八〇頁)と彼は付言する。ダニエルは人間的な愛に飽き足りず、それを越えたものを探索する。

ダニエルの突然の提案に、アニーは不承不承同意する。二人は寝室を別にする。ダニエルは正式な禁欲の誓いをするべく手筈を整える。アニーは「顔と顔を合わせたまま、離婚状態にある」(一八三頁)ことに苦しむ。しかし「自分の意に反して前方へと引かれてしまった線を引いたのが、ダニエルを越える何かである」(一八四頁)と推理し、流れに身をまかせる。かくしてオルレアン近郊のベネディクト会修道院で、ダニエルが霊的指導を受けているシモン神父の司式のもとで、二人は貞潔の誓願を立てる。

こののち、二人は職業は継続しながらも、「試み」あるいは「待機中」(一九〇頁)の時期として、修道院に頻繁に逗留する。ある日、ダニエルはアニーに、自分のみた奇妙な夢の話をする。その夢のなかで、ダニエルは「誰かと会う順番」を「待っている」(一九七頁)。彼はその「誰か」に「答」を「たずねたずねて」やってきた(一九七頁)。順番が廻ってきて、「遠くから何かが言われるのを耳」にする(一九八頁)。その「何か」とは、「砂漠」という語であ

る(一九八頁)。この夢は、ダニエルの目指すべきところが、砂漠であることを示唆している。この夢に応えるかのように、アニーは、二人がよく通うポワチエ近郊の修道院で、耳寄りな情報を得る。アニーは修道女ふうの女と対話したことがあつた。女は、「探してらっしゃる？」(一九九頁)と問う。アニーが、「ええ、探しています」と返事すると、女は、「そういう人に、時たま出会います。姿だけで、そうとわかります」と反応する(一九九頁)。アニーは、この修道院でも長くて一週間の滞在しか許されないので、「長期滞在できるといいんですけど」(二〇〇頁)と願いを述べる。するとその女性は「もしよかったら、こんなところがありますよ」(二〇〇頁)と言いながら、手帳の紙を一枚ちぎって、二つのアドレスを書き、アニーに手渡す。一つのアドレスは修道院の住所である。もうひとつはプスチニアという場所のもので、修道院から歩いて二十分ほどのところにある。プスチニアには長期にわたって身を落ち着けることができる。けれどもいきなり行つてもだめなので、修道院に泊まつて、それから聞きに行くことを女性は勧める。プスチニアがロシア語で「砂漠」を意味することは先述した。アニーは、プスチニアで生活することが、ダニエルが夢のなかで探しもとめていた「答」であるように思い、アドレスが記された紙片を彼に差し出す。

貞潔の誓願を立ててから一年後の復活祭の休みに、ダニエルはアニーとともにプスチニアを見に行く。二人は近くの修道院に三泊逗留する。場所は南仏にある。南仏の土地は、「明るさの源である陽



にまるで灼きつくされたかのような、不毛の相（二〇三頁）があつて、その相が「修道院」と「結ぶつく」と、「なにか過ぎ越しの広大な相をとる、と感じられ」（二〇四頁）、二人を魅了する。二人はプスチニアを創ったテレーズを訪ねる。現在、七つの小屋はふさがっている。だが一つが七月の終わりに空くので、そこにダニエルが入り、アニーはテレーズの小屋の中にある客部屋に入る、というふうなテレーズは決める。帰宅したダニエルは職を辞し、出身地に出向き、相続した不動産のいくらかを売る。ダニエルは何年分の生活費を手に入れ、その一部を現金で残す。「貧しい生活だから春までこれで足りるだろう」（二〇八頁）と彼は予測する。「春まで、つて？」とアニーがたずねると、「来年の春まで、ということさ」とダニエルは答える（二〇八頁）。ダニエルが南仏のプスチニアでの居住を、翌年の春までに限っていることがうかがえる。アニーは、「その先のことでもダニエルには見えているのだ」（二〇八頁）と推察する。とはいえ、「すでにダニエルに見えているものは人間の言葉で触ってはいけないもの」（二〇八頁）のような気がするので、彼女はそれ以上は訊かない。

アニーは出立のぎりぎりになって辞職する。七月、二人は南仏に発つ。ダニエルは、「出発から出発へと来たよなあ」（二一〇頁）と感慨にふける。二人はプスチニアで別々の生活を送る。テレーズの小屋の客部屋に身を置くアニーは、彼女から霊的指導を受け、成長する。ロシア人のワーニヤとも懇意になる。丸太小屋で一人で暮ら

すダニエルは、大工仕事に精を出す。「肉体労働がこんなにも」とは知らなかったよ（二二〇頁）と彼はアニーに手紙で連絡する。クリスマスが終わった頃、プスチニアの空いた小屋に、マリ修道士が居を定める。マリ修道士の小屋は、ダニエルの小屋と隣り合っている。それで二人は親交を結ぶ。ある日、「羊の群」や「砂漠」や「プスチニア」や「イコン」から、今いる場所が「東方へ向っているのを感じていた」アニーは、テレーズにそのことを聞きただす（二二三頁）。「東方といつても、アジアではないが」、「公会議以後、東方に向う一つの線が出てきている」（二二三頁）ことが判明する。アニーは、ダニエルの考えている二人の行先がイスラエルであるのを確信する。彼女は、「いつ、イスラエルへ、わたしたちは発つのでしょうか？」（二二四頁）と問うた紙切れを、ダニエルの小屋のドア下に滑りこませる。ダニエルは晩の祈りの折、「ここで復活祭を祝つてから。行先の具体的なことは、フレール・マリにきちんと教わっている」（二二四頁）と返答した紙片をアニーに手渡す。

復活祭がすぎ、イスラエルに旅立つ日が到来する。プスチニア近くの修道院で、ダニエルとアニーはミサのあと、「修道院付きの司祭をとおして清貧・貞潔・従順の誓願を立てる」（二二六頁）。「私的誓願」（二二六頁）である。二人は車で北上する。シモン神父のところに一泊して、それからパリのオルリ空港より飛行機でテルアヴィヴに発するためである。車中で、ダニエルはアニーに今後の計画を明かす。イスラエルでは、二人は最終的には、マリ修道士が

教えてくれた小屋で一緒に暮らすことになるが、当面は自分は男子修道院に、アニーは女子修道院に身を寄せることになる。と伝える。イスラエルに着いた二人は、離れ離れに生活する。アニーは「ほんのしばらくの別離と思ひこんでいた」のに、「この春から来年の春までと、ダニエルの手紙で知らされ」る(二二九頁)。彼女は修道院で、「修練者のような扱い」(二三〇頁)を願ひ出て、受け入れられる。ダニエルも、すでに同じ待遇を望んでいた。十月に、マリ修道士から教わった小屋を見に行ったとの、ダニエルからの便りを受けとる。その小屋はアラブ人の石造りの家で、「白い丘の段々状になつた斜面」の「小さな村」に存在する(二三三頁)。その村のはずれには女子修道院がある。アニーは小屋でダニエルとともに生きることを心待ちにする。冬になり、年が明ける。ダニエルから手紙が届く。「この春にアラブ人の家を借りることはできず、あと一年待たねばならない」(二三七頁)と記されている。手紙を見せられた修院長は、「待つことで浄化されていくのです」(二三七頁)とアニーを元気づける。

アニーはダニエルへの返信として、「その時が来るまで互いに文通しないでおう」(二三七頁)と書く。そういうわけで、ダニエルとの音信が途絶える。アニーは△至福▽と△苦痛▽の交錯するなかで日々をすごす。△至福▽とは、宗教的なよろこびである。△苦痛▽は修院長の言葉を借りれば、「この世に居て、別れている」(二二九頁)ことに由来する。「この世と別離している状態は、苦痛な

のです」(二三九頁)と修院長は説いている。一年が経つ。四旬節のさなかに、ダニエルから書簡がくる。復活節第三週の、四月×日に、二人は例のアラブ人の家に移り住む、という。「近くの女子修道院で、落ち合うことにしよう」(二四〇頁)とダニエルは指示する。

四月×日になる。アニーは修道女の車に乗せてもらつて出かける。指定した修道院の門前にダニエルが待っている。彼は車に乗り込み、石造りの家まで案内する。アニーはダニエルと二年ぶりで再会した。彼は髪を短くし、容姿に無頓着になっている。アニーは、「いくらか見知らぬ人と対面している気分」(二四三頁)になる。ともあれ、二人の共同生活が再開される。アニーは、「ダニエル、ジュ・テーム」(二四六頁)と口にする。ダニエルも、「アニー、ジュ・テーム」(二四六頁)と言ひ返す。これは、「禁欲を開始した時以來、互いに決して言わなかつた」(二四六頁)言葉である。だがこの△ジュ・テーム▽は、「同じベッドで同時に目が醒めて交わしたジュ・テーム」(二四六頁)ではない。魂のレベルで発せられたことばである。アニーは、「こんな生活こそ、わたしたちが望んでいたものね」(二四六頁)と喜ぶ。けれども彼女が「望んでいた」生活は長くはつづかない。八月頃、アニーは「ダニエルを見失つてしまった」ような感覚をもつ(二四八頁)。「まるでダニエルがますます大きな秘密を抱えていく」(二四八頁)と思えるからだ(二四八頁)。彼女は「見失つたダニエルを取り戻そうと」して、「凝視の目を向けるようになる」(二四八頁)。ある日、一人のアラブの女がダニエルの跡をつけるのを目撃する。これ以後、

アニーはそのアラブの女に時たま出くわす。「男を探す女のせいで、彼女は「見失っていたダニエルをふたたび見出」す(二五一頁)。「消えていたダニエルが、その肉的存在が、手で掴みとれるほどに、くつきりと、なまなましくなつて」くる(二五二頁)。ダニエルはアニーの様子がおかしいことに気づき、「アニー、君は、なにか秘密を抱えているようだ、近頃そう見えるよ」(二五一頁)と指摘する。「アニー、どうかしているよ」秘密なしにしようじゃないか(二五二頁)と責められたアニーは、ついに口を開く。「或る女が、あなたをねらっているわ」と彼女は知らせ、「男を探しているのが体全体から匂ってくる女。あなたの歩くところに、ちらちらと出没する女。知っているでしょ？」と問いただす(二五三頁)。ダニエルは、「はくはそんな女のことなら知らないよ」(二五四頁)と応答する。とはいえ彼は、自分が「この夏の間ずっと、内なる森で、破壊の力をたずさえた巨きな女に追跡されていた」と白状し、「ありがとう、アニーよ、君が(…)言ってくれたおかげで、そんなわるい力が消えていく」と感謝する(二五四頁)。

こののち、二人は共同生活に慣れ、時はまたたく間に流れる。二年目の冬期に入った頃、ベルリンの壁が消滅する。それから湾岸戦争が勃発し、ソ連が崩壊する。「南仏の土地で、二人そろつて決定的な一歩を踏み出した一九八五年以来、十年近い歳月が経」つ(二六四頁)。アニーは四十三歳、ダニエルは四十六歳になる。ある日、ダニエルは、「一年にわたつて一人で砂漠に隠遁することにした」(二

六四頁)と告知し、出ていく。一ヵ月ほどして、家の中を大掃除しているとき、アニーはダニエルの部屋のアイコンの裏に、『亡命者』と題された手記を見つめる。

こうして「小説『亡命者』」のあとには、「手記『亡命者』」がつづく。ダニエルが書いた手記には筋らしい筋はない。南仏のプスチニアで、マリ修道士とかわしたやりとり、イスラエルでアニーと共同生活を始めてから、庭仕事に行っている女子修道院で邂逅した、フランス人の少女との会話、イスラエルのプスチニアの壁に、マリ修道士が描いたと思われる聖マリの顔を発見したこと、しかし聖マリの顔を見ながら肉体の誘惑にとらえられたこと、共同生活を再開する前、アニーが世話になっていた女子修道院にいるスール・クロードが、アニーに宛てて書いた手紙を読んだこと、「マリ・ダニエルと改名するようにとの招きを受けた」(二八〇頁)こと、などが雑然と綴られている。だが神をもとめるダニエルの魂の声が、「手記」に統一性を与えている。なかでも、ダニエルの△砂漠▽への志向は注意をひく。彼は、「森ではなく、砂漠を。森の、蔭り、湿り、繁茂、豊饒でなく。砂漠の、無を」(二七一頁)熱望する。そして「神の喜び以外の何もないところが、砂漠」(二七九頁)であるとの理解に到達する。

△私▽が作成した「小説『亡命者』」、および「手記『亡命者』」を瞥見した。これらの物語の中心人物であるダニエルとアニーはモデルを有している。しかし同時に、△私▽の内面を糧としている。

それゆえ、ダニエルとアニーの物語から浮かび上がるのは、二人の、とくにダニエルの、神への希求である。

#### 四 神のほうへ

△私▽の物語、ならびにダニエルとアニーの物語を分析するなかで、△私▽およびダニエルとアニーにおける、神への希求を見さだめた。△私▽と、△私▽の創造する人物たちは神のほうに向かっていく。このことをあらためて確認するために、△私▽の亡命者の意識、プスチニアでの生活、男性への拒絶意識をあつかいたい。それからダニエルとアニーの内心の、信仰と愛との関係を問題にしたい。

##### (一) 亡命者の意識

△私▽の神への志向とからんで、△私▽が亡命者の意識をいんでいる点には留意すべきである。△私▽はフランスに滞在中、警視庁で六カ月ごとに滞在許可証を得なければならぬ。このことは、△私▽には「国境通過」(一六〇頁)と感ぜられる。「国境」を「通過」するとは、「日本人としての私を国境の向うに捨て」(一一二頁)ることである。作品の冒頭、△私▽は自分を「移民でも難民でもない」とみなしたうえで、「では、いったい何なのだろう」と自問し、「そう、亡命者という抽象的呼び名がいちばんぴったりする」と考察している(一七頁)。その理由は、「居ることの、はっきりした目的がない」(一七頁)からだ。確固とした目的をもつことなくフランスⅡ地上に居

住しているがゆえに、△私▽は自己を△亡命者▽と規定するのである。

△私▽の亡命者意識は、地理的国境のほかに、「もう一つの国境」(八六頁)への意識が付け加わることでいやます。△私▽は一九八四年の六月末にマリ・リユスとともに、ポワチエの南の修道院に行く。このあと、別の修道院に逗留することを希望する△私▽は、マリ・リユスにアドレスと電話番号を紙片に書いてもらい、一人目的地に向かう。この折、△私▽は「まるで国境を越えていくような困難さ」を味わい、「探しているものを見つけるには、いわば国境の先へ出なければならぬ」ような感慨にふける(六七頁)。マリ・リユスの兄のいる修道院に二度目に滞在したとき、五、六十人の黒衣の修道士たちを目の当たりにして、△私▽には「彼らすべてが亡命者」(八六頁)のようにみえる。「私は私で日本からフランスへと国境を越えてきたけれども、彼らは、もう一つ別な国境を越えてしまっている」(八六頁)と思われる。「私が日本からフランスへと国境を越えてきたのは、じつは、この、もう一つの国境へむけてであったらしい」(九二頁)と△私▽は推量する。国境を越える、亡命するとは、この世(的なもの)と縁を切り、神の国におもむくことでもある。国境とは、この世(こちら側)と神の国(あちら側)との境目をも意味する。したがって、△私▽は神を目指して進むにつれて、ますます亡命者の意識を強めることになる。

△私▽のユダヤ人への共感も、このことと関係する。△私▽はユ

ダヤ人たちが「祖国をもたぬ」（一三六頁）がゆえに、「地上において死なされている」（二〇五頁）と黙考する。△私▽は、自分もまた、「地上において死んでいる」（二〇五頁）と判ずる。だからこそ、△私▽は「人類最大の亡命者」であるユダヤ人に「親しみ」を覚える（二〇五頁）。このユダヤ人への共感によって、△私▽が亡命者の意識をつのらせていることがわかる。

すでに述べたように、△私▽は第二部の冒頭、同じ建物の四階に住む老婦人から、オルセー美術館の切符を買う。はじめ老婦人は切符をタダで△私▽に贈ろうとする。けれども△私▽が「買わせていただきますわ」と言い、代金を支払うと、「ありがとう、これ、今度のウィーク・エンドに、黙想の家へ泊まる助けになります」と謝辞を述べる（一六五頁）。このあと、話題は修道院のことに移る。老婦人は「禁域」すなわち修道院に「入ってしまった人々」のことに言及する（一六六頁）。△私▽は、「あの人たち、亡命者ですね」「こちらから、あちらへと、亡命したのですね」（一六七頁）と念を押す。すると老婦人は、「マドモワゼル、それは逆ですよ」と反駁し、「わたしたちすべて、人間すべて、あちらからこちらへと亡命してきているのです」と断定する（一六七頁）。老婦人の言葉を聞いた△私▽は、認識をあらためる。「生れて以来、何処にいても、居場所でないと感じつつづけた、わけが、わかった」と合点し、「逆なのです、わたしたちすべて、人間すべて、あちらからこちらへと亡命してきているのです。／あちらへと亡命するのではなく、この亡命地

からあちらへと帰っていくのです。かつて、そこに居たのですから」と心の中でつぶやく（一七〇頁）。△私▽はこの世が亡命地であり、神の国が祖国であるとの認識をもつに至る。「小説『亡命者』はこうした認識のもとに制作される。ダニエルは「この世の生存」を「亡命状態」と把握する（二四六頁）。アニーはイスラエルに移住し、ダニエルと共同の家で暮らせるようになったとき、「いくらか祖国へ帰って」（二四七頁）いるような気分に襲われる。神の国に近くにつれて、「祖国」に回帰するような感覚に見舞われる。ということはすなわち、アニーにとってもまた、地上は亡命地である。このように、ダニエルとアニーはどちらも、地上が亡命地であり、神の国が帰るべき祖国であると知覚している。二人の知覚は△私▽の認識を反映する。△私▽が『亡命者』と題した小説を手がけるのは、△私▽が亡命者の意識をいだきながら、ひたむきに神をもとめていることを意味する。

## (2) プスチニアでの生活

△私▽のプスチニアでの生活に目を向けることにしよう。△私▽はマリ・エステル、マルセルを知ることによって、この生活をはじめる。マルセルからゆずりうけて最終的に住むプスチニアは、「縦三メートル・幅二メートルほどの小部屋」で、「入った正面の木床に、壁に立てかけて、イコンがあり、わきに赤いコップ・ローソクがある」（二〇頁）。そして「縦三メートルの右端に、厚いマットの上に敷ぶ

とんをのせただけの寝床」(二〇頁)がある。その寝床は「人の体形よりもすこしだけはみだす小ささ」(二〇頁)である。「ベッドではなくて靴で歩く木床にじかに置く仕方」を、△私▽は「ヨーロッパの習慣ではなく、「オリエントの貧しい人々のもの、或るいは、古来の砂漠の民のもの」と推定している(二〇頁)。バス・シヤワー、トイレがないことは先述したとおりである。くわえて、鏡さえ、不要なものとして取り除かれる。マリ・エステルは△私▽に、「砂漠に入るってどんなことかわかりますか。たとえば、一日のうち何回、鏡を見ますか。それをやめなければなりません」(二〇三頁)と言いはなっていた。△私▽は、「そもそも、現代において鏡のない生活がありうるなど誰が思うだろう」(二二頁)と反応する。だがマリ・エステルは、「ほら、こんなふうは何処か見えないところに、小さな小さな鏡を貼りつけておけばいいのです、必要な時のためにだけ」(二二頁)とさとす。△私▽はマリ・エステルと同じようにすることを決意する。「一瞬の決断によって、常に常に鏡を見て生きてきた自分の部分を切り捨てた。まるで、その切り口から血しぶきが上ったかのようなだった。誰だってそうだろう、女でなくとも男だって。鏡を見ることをやめる時、その決断の時、血しぶきが上るのではないだろうか」(二二頁)と、△私▽は振り返っている。しかし、「なにか恐ろしいようなことだ、人の生存のなかに自分の顔を見る鏡というものが、まったく当り前のことのように嵌めこまれていて、そのことがどれほどの比重を占めるかを誰も忘れてしまっ

ているほど、自分を愛する意識が人知れず細胞増殖をつづけているとは」(二二―二三頁)と認識する。△私▽は「自分を愛する意識」を「人知れず」培養するものとして鏡を排斥することになる。

プスチニアは物質的な欲望を禁じ、「社会的な最下層とまったく同じ物質的条件で成り立っている」(二三八頁)。このことは、プスチニアの住人たちの、シコレを飲むという習慣によって瞭然としている。「マリ・エステルのでころで朝食に飲んだシコレというものを、マルセルも使っているのを目にし」(二三七頁)た△私▽は、自分もまた使うようになる。ある日、スーパーでシコレの大きな罐を探している老婦人に、△私▽は、「シコレって何ですか。コーヒーの安いものですか」(二三七頁)とたずねる。「シコレという植物の根を、乾かして粉末にしたものです。コーヒーと似た味ですが、コーヒーは高いので、こんなふうになくさんシコレが出まわっています」(二三七頁)と、老婦人は説明する。そして「フランスでは、一番ぜいたくは紅茶です。そのできない人がコーヒー、そのできない人がシコレ」(二三八頁)と言い添える。シコレは、貧しい者たちが飲む飲料である。マリ・エステルは、「物質文明にまつわる欲望の極まった今日は、また、砂漠への渇きが潜在している時代でもありません」(二〇―二二頁)と主張している。シコレは物質的な豊かさを拒否し、貧しさの追求の一環として選ばれた品物である。それゆえ、彼女の言う「砂漠への渇き」を象徴的にあらわすものと解釈することができる。

プスチニアとはロシア語で△砂漠▽を意味することは繰り返すまでもないが、その△砂漠▽とは、マリ・エステルが教えていたように、「神の沈黙と自身の沈黙とを合一させ、一対一でいる」（九五頁）ところである。パリでプスチニアを持った△私▽は、「都市ではないところでそれ（プスチニア）を生きているのでないかぎり、どこか中途半端なものが私にある」（二五五頁）とマリ・エステルに手紙で知らせる。すると、「そうです、人里離れたところで、本来プスチニアというものがありません。けれども、いつか言いましたように、何処にいても、あなた自身が人里離れていなければならないのです。つまり、あなたの意識が」（二五五頁）との返事がかえってくる。「プスチニアというロシア語は砂漠という意味だと申しましたが、あなたの意識自体がプスチニアになる。雑多な音の充ち充ちた都市にあっても、そこは沈黙に充ちています。そこで「一対一」に居るからです」（二五五頁）とマリ・エステルは力説する。マリ・エステルの励ましを受けた△私▽は、パリでプスチニア生活を続行する。自分の意識を「沈黙に充ち」た砂漠にし、「一対一」で神と対峙しようとする。一途に神をもとめ、神への歩みを貫徹しようとする△私▽の姿勢が再確認できる。

### (3) 男性への拒絶意識

△私▽の亡命者意識、プスチニアでの暮らしをしらべ、△私▽における、神へのひたすらな志向を看取した。では、△私▽のなかで、

人間的な愛はどのような位置を占めるのか。△私▽は女性として、男性をどのように眺めているのであろうか。今度は、この点を探査しよう。

まず、△私▽が異性をかなり意識しているという点を指摘しておきたい。一九八四年六月末、神秘霊生史の講座が終わる。△私▽はマリ・リユスト、ポワチエの南のベネディクト会修道院に出かける。地下の小さな祈禱室でお祈りをあげる。△私▽のほかに誰もいない。ところが、扉が突然開いて、一人の男が入ってくる。「ギイツ、ガチャン、と閉まる音」で、△私▽は、「扉が厚い金属で出来ている」ことを知る（六四頁）。「ふいに私のうちに恐怖が目ざめ」る（六四頁）。「男性用の宿泊所に黙想のために泊っている人だろう、とはわかっていても、この種のことが始まると、どうしようもなくなってしまう（六四頁）。「聖と魔との気流の交錯する場に、私はな」る（六四頁）。「厚い金属の扉に錠がかかってしまった。叫んでも外には聞えない。男とともに幽閉されている」（六四頁）と、△私▽の内なる声が囁く。このような恐怖から、△私▽が男性をとっても意識していること、加賀乙彦氏が認定するように、「女性として男性の存在に非常に敏感で」あることが判明する。

一九八五年の七月、南フランスの女子修道院に滞在中、△私▽は夕暮れどき、小川を見に散歩に行く。あたりには誰もいない。だが△私▽は、自分の歩く「一本道の、ずっと先に、褐色の顔をした背丈の高い男が、こちらへ歩いてくる」のを認める（一五一頁）。

△私▽は、「ふいに故なき恐れが浮上するのを」感じて立ち止まる（二五二頁）。「このまま進もうか、それとも逆戻りしようか」（二五一頁）と自問する。しかし自問するや否や、「本能的に私の体」は「逆戻りのほうをと」る（二五二頁）。「すくなくとも後方には修道院がある、と思ったから」だ（二五二頁）。「足早に戻っていく私の背後に、男が足早に来る靴音がし、初めは五十メートルほどの間があったというのに、その靴音がぐんぐん近くに聞えてくる」（二五一頁）。△私▽は恐怖にかられて走りだす。もつとも、△私▽の逃走は長くはつづかない。しばらくして「振り返ると、誰もいなかった」（二五二頁）からだ。ここでの恐怖もまた、△私▽が男性を強く意識していること、「男性の存在に非常に敏感」であることを明示している。この恐怖は異性的・肉体的なものへの恐れである。したがって、△私▽の男性への敏感さは、男性への執着ではない。男性の拒否の感情、異性的・肉体的なものを拒絶する気持ちの強さをあらわしている。△私▽の男性意識とは、男性への拒絶意識である。

#### （４）ダニエルとアニーにおける信仰と愛

このことを踏まえたくえで、ダニエルとアニーの物語に目を転じ、二人における信仰と愛の関係を明確にしたい。ダニエルは、「二人が別れないで、このまま共に修道者になる」（二〇三頁）ことを目指す。「一組の男女が愛し合ったまま「愛し合う」ことができたなら、このヨーロッパでどれほどの男たち女たちが昼に夜に夢みたこ

とだろう、そんな夢の沈積している記憶なき記憶が、ほくを後押しするんだ」（二〇三頁）と、彼は肺肝を披く。ダニエルの切望するのは、愛し合うことと「愛し合う」こととの両立である。「愛し合う」が、カッコの付いた「愛し合う」が、人と神との関係を表現した動詞であることはことわるまでもない。ダニエルの願いは、人を愛することと神を愛することとの両立だと言いかえられる。とはいえ、彼の意識のなかでは、神への愛のほうが人間への愛よりも優位を占める。だからこそ、ダニエルは二人の寝室を別にし、貞潔の誓願を正式に立てようとするのだ。

これにたいして、アニーの内心では、人間的な愛、ダニエルへの愛が支配的である。なるほど彼女のなかにも、信仰、神への愛は存在する。二人は「市民結婚」（一八三頁）しかしなかった。アニーは教会での結婚式を望んでいた。二人が知り合ったばかりの頃、ダニエルはアニーの内に、「別な「人」への愛がある」（一七八頁）のを見いだして、非難していた。別な「人」とは、もちろんイエス・キリストである。ダニエルがついに修道者になることを欲するの、アニーの内心の信仰にかかわる部分に触れたためである。しかしながら、アニーは信仰を有しながらも、ダニエルとの結婚生活を疑問視しない。というより、それに満足する。それゆえ、ダニエルの修道者になる意向を知って、アニーは悩む。「別れたいんじゃないの？ 幸い、わたしたち、市民結婚だけだから、罪にはならず離婚できるわよ。さっさと、あなた一人、修道者になればいい！」と、彼女



はダニエルに不満をぶつけ、「まるで、離婚を言い渡されたみたい。でも、それならそれで離れてしまえばいい。あなたの言いだししたこととは、何か酷いこと。顔と顔を合わせたまま、離婚状態にあるってことだから」と苦しみをうったえる(一八三頁)。アニーの煩悶は女として肉体をもつことに起因するものであり、肉の懊悩である。オルレアン近郊の修道院で貞潔の誓願を立てる前日、彼女は、「この人、十年來あれほどわたしの言ってきたことに反論してきたというのに、さつさと、わかっつてしまい、先を行く。そして、わたしはいえ、ダニエルにこんなに執して、こちらへ取り戻そうとしているなんて、何という逆転喜劇だろう」と反省し、「ダニエル、ダニエル、ジュ・テーム。あなた以外のものではなく、あなたをこそ愛す」と独りごつ(一八六頁)。このように、アニーにおいては、はじめ、愛が信仰よりもいやまざる。

貞潔の誓願を立てたあとも、アニーは愛を乗り越えることができない。週末、オルレアン近郊の修道院を三度目に訪ねたとき、アニーの「夢想」がダニエルを「妨げる」ということが起こる(一九〇頁)。二人は隣り合った部屋に泊まるので、アニーの「夢想が、壁を伝って」彼の「部屋に入ってくる」(一九一頁)。「ぼくが別なことを思っている時に、それが伝ってきて妨げる、と言っているのだ」(一九一頁)とダニエルは口を立てる。彼は、アニーの愛の想念が自己の宗教的な観想の妨げになっていることを告知している。家では、「世間のさわぎの只中にいるから」(一九二頁)、こういうことは生じない。

だが世間から隔絶した修道院では、事情はことなるのである。ともかく、ここでは、アニーが修道院においても、愛するダニエルのことを想っているという点が注目される。

こういうことがあって、ダニエルは、ポワチエ近郊の修道院に、休暇をとって一週間ほど滞在することを計画したとき、自分は「禁域内に泊まる、君(アニー)」は外の家に泊まる、というふうに申し込「む」(一九〇頁)。シモン神父の勧めに従って、「離れ離れに泊まる」(一九三頁)よう決める。神父によれば、「修道生活には修練期というものがあ」り、それは「まず物理的に離れる期間」であるからだ(一九三頁)。もつとも、アニーは修道院で、「ずっと(…)苦悩に切り刻まれ」る(一九三頁)。「あれほど親密であったダニエルとの間に、もう越えられぬ淵ができていて、その淵にはまだ「霊」が充ちてはこず、ぞっとするような空白が大きな刃となって胸を切りつけてく」る(一九三頁)。アニーはダニエルとのあいだに距離を感じ、愛の苦悩にさいなまれる。彼女はシモン神父に長電話し、「あたりまえですよ、あたりまえですよ」(一九五頁)と慰め、勇気づけられる。けれどもアニーが愛の苦しみゆえに、神のほうに向かいえないという点は、看過してはならない。

しかしながら、アニーは愛を克服していく。二人はこのちもポワチエ近郊の修道院で週末をすごす。その折彼女は、「誰でも一人で行く道を、例外的に、自分は愛する男と二人して行くことを選んだ、いや、選ばせられた」が、「この愛する男そのものが妨げなのだ」

と思案する(二〇〇頁)。アニーは愛よりも信仰を重視し、人間的な愛が神のほうに歩みを進める際の障害になると考えるに至る。修道院で「離れ離れに泊まる」ことに最初は苦しむにせよ、「この別離が必要だ」(二〇〇頁)と悟るようになる。また、南仏のプスチニアを見に行ったとき、二人はテレーズの小屋の小さな祈禱室に案内され、即座に宗教的瞑想にふける。二人は隣り合って坐っている。だがアニーは、「こんなに近くににいるのに、ダニエルを感じなくなる」(二〇五頁)。「なぜなら、別なもので充たされているから」(二〇五頁)。「別なもの」とは、宗教的な瞑想がもたらす幸福感のことである。アニーの内心においても、信仰が愛に打ち克つことになる。彼女はもはやダニエルへの肉体的欲望に苦しまない。このことは、二人が南仏のプスチニアに離れ離れに暮らすようになったとき、「ダニエルはどうなっているのだろう」と、常に思っているが、二人の間に距離があってもアニーの中で沸きたち湧きたつていたものが、いわば乾き、なりをひそめてしまっていた(二一九頁)と語られているところからも明白である。アニーは当初、人間的な愛に呻吟する。しかしこの呻吟から脱し、靈的に成長していく。

ダニエルとアニーの内面で、信仰と愛とは両立・共存しているのであろうか。はじめのうち、アニーが人間的な愛に苦悩するために、二人のなかで信仰と愛とは敵対する。けれどもアニーが靈的に成長するにつれて、信仰と愛は両立・共存の方向をたどる。イスラエルに滞在して二年の歳月が流れ、それまで別々の修道院にいたダニエ

ルとアニーは白い石造りの小屋でようやく共同生活を始める。「ダニエル、ジュ・テーム」「アニー、ジュ・テーム」と言いあう場面(二四六頁)では、二人は愛し合ったまま、「愛し合」っている。二人の内心で、二つの愛、人間への愛と神への愛とは共存している。とはいえ、この共存状態は長くはつづかない。まもなくアニーはダニエルを「見失ってしまった」(二四八頁)ような気がする。「互いに秘密なしにしようと言いついて、何でも話し合ってきたというのに、まるでダニエルがますます大きな秘密を抱えていくようにさえ思える」(二四八頁)。もつとも、アニーはすでに見たように、一人のアラブの女がダニエルを付け狙っていると誤解する。このとき、彼女は彼の「肉的存在」を感じ、「見失っていたダニエルをふたたび見出した」ような印象をいだく(二五一頁)。だが誤解がとけると、アニーはまたしても彼を見失う。ある日、彼女は、「自分がダニエルを見失ったからには、ダニエルだってそうだろう」と推測して、「ダニエル、あなたはわたしを見失ったのではないの?」と切り出す(二五七頁)。「そういえば、そうだよ」(二五八頁)とダニエルは答える。はつきりさせたいアニーは、「そういえば、そうって?」(二五八頁)と問い返す。「言われるまで、思っていないからかなあ」(二五八頁)とダニエルは弁解する。「それなら、見失っているんだわ、思っていないこと自体」(二五八頁)とアニーは断じる。これにたいして、ダニエルは、「これでいいんだよ、アニー。むしろ、このことへ向けて、ぼくたちはやって来たのではなかったかね。すくなくと

も、ほくは、もう何年前に、禁欲を言い出した時、今のこのことが先の先に見えていたよ」(二五八頁)と言葉をかえす。

ダニエルは相手を「見失う」という今の事態を予測していた。彼にとつて、「見失う」とは愛することをやめるということであろう。貞潔の誓願を立てて十カ月が経った頃、ダニエルはアニーに、シモン神父の賛同を得たうえで、「愛し合ったまま、「愛し合う」ことができるようになれば、もう愛し合わなくなって、それでも「愛し合う」ことの底の底に愛し合っていた記憶がうっすら残る、これは人間存在の全的な天上での姿なんじゃないか」(二〇三頁)との意見を表明していた。彼が「愛し合ったまま「愛し合う」ことができるようになれば、もう愛し合わなくなって」云々と云っている点は重要である。ダニエルは愛し合うことと「愛し合う」こととの両立、人間を愛することと神を愛することとの両立を切願しつつも、神とのあいだに愛の関係が成立すれば、もはや人間を深く愛することはなくなるのだと推考している。この引用文の少し先には、語り手の問いかけとして、「愛し合う」ことへと、愛し合うことを過ぎ越してしまうのに、まだどれほどの時を経なければならぬことか」(二〇四頁)という一文が読める。「小説『亡命者』」において、人と人とのあいだの愛の関係は、人と神とのあいだの愛の関係が成り立つための前段階にすぎない。人間への愛は、神への愛のために「過ぎ越」すべきものである。

したがって、△私▽が完成した物語のなかでは、人間への愛より

も信仰が重要視される。ダニエルが「修道者になろう」として貞潔の誓願を立てるのは、このためである。これは、△私▽が男性を、異性的・肉体的なことから拒絶しているということと密接に関連する。物語の終わり、ダニエルは、イスラエルでアニーと念願の共同生活を送ることになるものの、それに飽き足らず、「一年にわたって一人で砂漠に隠遁する」(二六四頁)べく小屋をあとにする。ダニエルの砂漠への出発は、彼が人間への愛よりも宗教に価値を置いていることの証左である。アニーにしても、最初は人間的な愛に苦悶するにせよ、次第に信仰を追求するようになる。イスラエルでダニエルと一緒に暮らすようになったアニーは前述のように、彼を見失ったように感じる。それはなぜか。「仕合わせ、仕合わせ、と自分に言っているアニーの、その、宇宙感覚のようなものが広がっていけばいくほど、アニーは見失ったダニエルをもう取り戻すすべもなくなくなっていった」(二五七頁)という記述が、考察の糸口を与えてくれる。ここで言われている「仕合わせ」とは、宗教的な幸福感である。この幸福感は、神とともにあること、さもなければ、神をもとめることから生じる。「宇宙感覚のようなもの」の「広が」とは、神の探求とかかわっている。アニーはこの「広が」りのなかで、ダニエルとの距離を実感する。アニーがダニエルを「取り戻す」ことができないのは、彼女の意識が神のほうを向いているからである。アニーの内心で、神への愛が人間への愛をはるかに凌駕しているからこそ、彼女はダニエルを見いだしえないのである。さら

に、アニーはダニエルの砂漠への旅立ちに少しも動揺しない。彼の出發を平靜に見送っている。この事実もまた、アニーの内心を、愛ではなく信仰が支配していることを示している。

このように「小説『亡命者』」において、ダニエルだけでなく、アニーもまた、信仰を希求する。物語の作者である△私▽が神を志向する以上、それは当然の帰結である。

## 五 おわりに

『亡命者』の読解をこころみた。はじめに△私▽の物語を、次にダニエルとアニーの物語を概観し、これらの人物たちにおける神への希求に着目した。それから△私▽の亡命者の意識、プスチニアでの生活をしらべ、△私▽が一途に神をもとめていることを見た。そして△私▽の男性への意識を問題にし、△私▽が異性的・肉体的なものを拒絶していることを一瞥した。さいごにダニエルとアニーの物語を再度取り上げ、二人における信仰と愛の関係を検討した。その過程で、二人の内面で信仰が愛に打ち克つさまを識別した。

こうして、作品において浮き彫りにされるのは、△私▽の、あるいはダニエルとアニーのひたすらな信仰である。作中人物たちは希望をいだき、上昇することを願い、神をもとめる。それゆえ、作品の色調は暗くはない。△私▽は「この世すべてが、寒い」（八頁）と思ひながらも、信仰をもっているのだ、気持ちには明るく、「明る

い日に／私は生きています」と確信している。この文句ではじまる詩が、第一部の冒頭（二八一―一九頁）と第二部の冒頭（二六一―一六二頁）で引用されている。「手記『亡命者』」のなかで、ダニエルもまた、「明るい日に生きています／底が明るくて／底なき底が明るくて」云々といったような、類似した詩を作り上げている。この詩も、「手記」で二度出てきている（二六六、二七六頁）。△私▽と同じくダニエルも、希望に満ちた信仰を有するために、明るさ＝光のなか生きていくとの認識を保持する。この認識は不変的なものである。だからこそ、ダニエルは「手記」を制作した年代を、はじめは一九九六年としながらも、「いや、年を間違ったか」と自らに問うて、二〇〇三年とし、ついには「同じことだ」と判断して、二〇一〇年と正すのである（二八三頁）。この年代の訂正は、ダニエルの魂の状態が時の流れに応じて変わることではなく、いつまでも同一であることを含意する。

高橋たか子における他者の不在の問題とのかかわりで、『亡命者』をとらえておきたい。いったい、作中人物たちの意識のなかで、他者は存在するのであるか。まず△私▽の場合を見てみることにしよう。△私▽はマリ・リュース、マリ・エステル、マルセルといった女性たちとめぐりあい、靈的に成長する。△私▽の修道院逗留、プスチニアでの生活は、これらの女性たちとの邂逅がなければなかったであろう。とはいえ、彼女たちは連帯もしくは愛の対象として、△私▽が意識する他者ではない。アニーとダニエルはどうか。

△私▽はこのカッブルをモデルとして小説を書く。彼らは△私▽の内面に宿っている。けれどもこの二人は、小説家としての△私▽の想像力を刺戟する存在にすぎない。現実生活の場では、先の女性たちと同様、連帯または愛の対象としての存在ではない。△私▽は全き孤独のなかで神を探求しており、△私▽の内心では、他者は基本的に存在しない。

△私▽が執筆した物語のなかの、ダニエルはどうか。ダニエルはアニーと結婚したにもかかわらず、二人で修道者になることを目指し、肉体的欲望を断つ。アニーは彼にとって、愛の対象としての唯一の他者である。しかしダニエルが神をもとめ、信仰をつらぬく過程で、彼の意識からは、アニーは徐々に消え去る。イスラエルで二人で暮らすようになってから、「ダニエル、あなたはわたしを見失ったのではないの？」(二五七頁)とアニーから訊かれて、ダニエルは「そういえば、そうだよ」(二五八頁)と返答していた。「愛し合っていたことを見失う」と言うアニーにたいして、彼は「いや、むしろ、かすかな記憶のように思い出す」と応じている(二五八頁)。ダニエルにとって、アニーとの愛はかすかな思い出にすぎなくなる。アニーは彼の意識を占めない存在となる。神がダニエルの意識を支配していくのに比例して、アニーは彼の内心で、存在の度合いを減少させる。彼の生の歩みは神に向かつての歩みであると同時に、他者の喪失過程であるともみなしうる。ダニエルはアニーとの共同生活を放棄し、とうとう「一人で砂漠に隠遁する」(二六四頁)。一年と

期間を区切り、「アニー、かならず帰ってくるから」(二六四頁)と言い残しているものの、ダニエルの砂漠への出発は、彼の内心で他者が存在しないことを証している。ダニエルの内面を最終的に特徴づけるのは、他者の不在である。

アニーの生の歩みもまた、他者の喪失過程である。ダニエルにとってアニーがそうであつたように、アニーにとって、ダニエルは唯一の他者である。ダニエルが修道者になることを目標としてから、アニーはしばし人間的な愛の苦悩を味わう。しかし彼女のなかで、信仰が愛よりも優勢になる。そして神を希求するにつれて、次第にダニエルを見失う。とはいえ、アニーの場合は、他者の不在を云々することはできない。彼女の人生はつねにダニエルの意向に沿うかたちで展開するからだ。それにアニーは、物語のさいごの、ダニエルの砂漠への旅立ちを、冷静にうけとめるものの、自ら望んだわけではない。あくまでダニエルとともに生きることを願っている。それゆえ、アニーの生の歩みは他者の喪失過程であるとしても、彼女においては、かろうじて他者は存在すると判定すべきである。

このように「小説『亡命者』」のなかで、他者≡愛は、ダニエルにおいては存在しないのにたいして、アニーの内面では存在する。アニーの愛は、作品の色調に関与する。前述のように、△私▽やダニエルは希望に満ちた信仰を有するために、明るさ≡光のなかに生きていくと自覚している。作品の明るさは、△私▽やダニエルの信仰に立脚する。と同時に、ダニエルにたいするアニーの愛によって

も、それはもたらされている。というのも、△私▽やダニエルの信仰は他者のいない孤独のなかで追求されており、絶対的孤独はかならずしも光明と結びつかないからだ。アニーの愛があることによつて、ダニエルの信仰の物語が、ひいては作品全体が光輝を獲得しているとも解することができるのだ。

しかしながら、△私▽の作成した物語において、アニーはダニエルに付随ないし従属する人物にすぎない。中心をなすのはダニエルであり、彼の神の探求のほうに、アニーにおける愛と信仰の葛藤よりも大きな比重を占める。このことは、作品の終わりに、ダニエルが書き記した「手記『亡命者』」が置かれていることから明瞭である。先に述べたように、ダニエルとアニーは△私▽の内面を糧とする人物であり、△私▽の分身である。だが信仰にんしては、△私▽はアニーよりもダニエルのほうに、より多くを託している。<sup>10</sup>したがつて、『亡命者』でも、これまでの作品群と同じように、基本的に他者⇨愛の不在が人物たちの内面を特徴づけているといえよう。なるほど、△私▽やダニエルのように、信仰をもつばら追求するとき、他者⇨愛が意識から消滅するのは、ごく自然の成り行きである。しかし高橋たか子における他者の不在の問題は、依然としてこのころのである。管見によれば、この問題が解決されるのは、『きれいな人』においてである。『きれいな人』を読むことを、今後の課題としたい。

## 註

- (1) 『この晩年という時』講談社、二〇〇二、三三二頁。
- (2) 同右、三三―三三三頁。
- (3) 同右、一五三―一五四頁。
- (4) 同右、一五四頁。
- (5) 『亡命者』からの引用文の頁数のみ、本文で示す。テキストは、一九九五年発行の、講談社の単行本を用いる。
- (6) △私▽の年齢にかんしてであるが、△私▽は一九八四年の二月、マリリュースと出会う。このときの二人の会話で、△私▽は自分の年齢を「四十八」（四六頁）だと言っている。
- (7) マルセルの部屋は、△私▽の部屋から歩いて五、六分のところにある。
- (8) 結婚によって、アニーもまた、それまで勤めていた、パリの書店をやめ、ダニエルの就職先である地方都市で、同じく書店での仕事を見つける。
- (9) 加賀乙彦「創作合評」、『群像』一九九五年九月号、三四三頁。
- (10) △私▽はダニエルに、自分の夢と類似した夢をみさせている。ダニエルは「誰かと会う順番」を「待っている」（一九七頁）夢をみ、「順番」がきて、「遠くから何かと言われるのを耳」にする（一九八頁）。その「何か」とは「砂漠」という語である（一九八頁）が、△私▽もまた、「誰か男の人と話をする順番」を「待っている」（二三八頁）る夢をみ、「順番が来て」、「遠くから何かと言われる」（二三九頁）のを聞いている。ダニエルの夢は△私▽の夢の引き写しである。またダニエルは「手記『亡命者』」のなかで、「青い水が砂漠のまん中に蜿蜒と流れている」（二八二頁）夢をみたことを語っている。

る。△私▽のほうは、自分が住むことになった新しい家の窓の下に、海の「青い水が波打っている」(一三九頁)夢をみている。この二つの夢は「青い水」が出てくることで共通する。ダニエルの夢は△私▽の夢を踏まえている。△私▽は自分のみた夢に基づいて、ダニエルの夢を形象化している。この点からも、アニーよりもダニエルのほうが△私▽に近い人物であると断ずることができる。